



平子 鐸 嶺

術新報』『絵画叢誌』『聖徳』『日本及日本人』『六
大新報』及び新聞等に仏
教美術に関する論文や論
説を執筆。特に法隆寺再
建非再建論争の折りに非
再建論の先頭に立ち、喜
田貞吉と論争を繰り広げ
たことは有名で、本校卒業生のなかでは大村西崖、関保之助、戸部
隆吉らと同様に学問的な業績をあげて異彩を放った。

五月十四日、築地本願寺別院で追悼会が行われ、中川忠順、今泉
雄作、正木直彦、黒板勝美、ラングドン・ウォーナーをはじめ百五
十名が参会した。その後間もなく友人たちが『柏のおち葉』を刊
行。墓は郷里津市の浄安寺に建てられた。四十四年十月には法隆寺
山内に鐸嶺供養の石製五輪塔が建立され、十月十六日に挙行された
その供養式には黒板勝美、大槻文彦、岡倉覚三、カーチス(ボストン
博物館日本部長)その他の有識者が参会したが、このとき演壇に立っ
た岡倉は法隆寺の研究と保護を目的とする法隆寺会の結成を提唱
し、自ら尽力する意志のあることを示し、それが一つの発端となっ
て、のちに正木直彦、黒板勝美らの尽力により法隆寺の一大支援団
体である聖徳太子奉讃会が設立された(大正十年)。なお、大正三年
には鐸嶺の論文三十四篇と友人たちの文を収録した『仏教芸術の研
究』が友人たちの手で刊行され、昭和四十九年には野田允太著『鐸
嶺平子尚先生著作年表・略歴』が刊行されており、これらによって

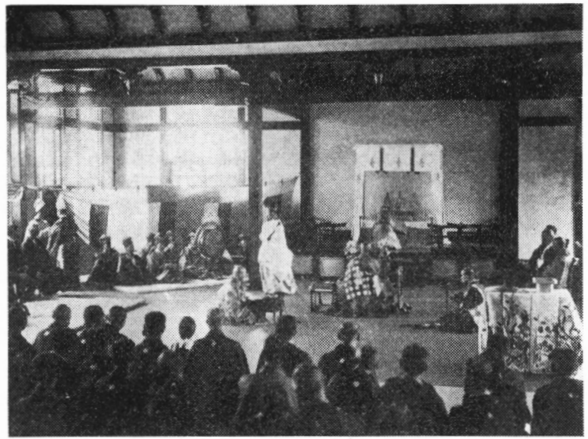
研究に燃え尽きた生涯を一望することができる。

⑥ 上宮太子祭と記念展覧会

明治四十四年六月十一日、本校の新築大講堂で国華倶楽部主催の
上宮太子祭が催され、当日と翌日の二日間、本校主催の太子祭記念
展覧会が開催された。『東京美術学校校友会月報』第九巻第十号は
「上宮太子祭及記念展覧会号」として発行されており、次に掲げる
発行主旨のなかに行事の目的も記されている。

上宮太子祭の濫觴

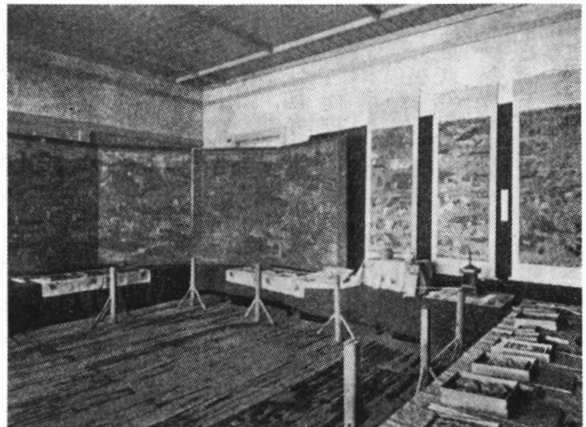
日出國千三百有餘年の昔、推古天皇の御宇、凡百の制度を定めら
れ、文化を促進せられ、藝術を發展せしめられたるは、厩戸豊聰
耳皇子と稱へ奉りし、上宮聖徳太子の賜なりとす。故に藝術家に
在りては、太子は實に斯道の先達として、將た恩師として、一日
も忘るべきにあらざるなり。我東京の美術家團體たる國華倶楽部
は茲に見る所あり。客歲阿佐太子の筆と傳ふる太子の御影寫を本
尊として、四月十一日を卜し、忍が岡の韻松亭にて其祭祀を舉行
したりしが、今茲明治四十四年六月十一日には、祭場を東京美術
學校の新築大講堂と定め、同校教授帝室技藝員高村光雲翁の謹刻
に成りたる太子の御像を本尊として、因縁最も深き大和國の法隆
寺管主を招きて開眼の式を行ひ、酒饌を具へ、舞樂を奏して、盛
なる祭祀をなし、別に東京美術學校に於ては、之れを機として、
太子に關係ある當代の遺品等を展覧せり。今茲に太子祭及展覧會
に關する事柄を蒐録するは、啻に此盛典を紀念せんとするのみに
あらず、亦太子の恩徳の深く高きを傳へんと欲する微衷に外なら



上宮太子祭供饌



上宮太子祭奉納舞楽 胡蝶



上宮太子祭記念展覧会会場

ざるなり。

上宮太子祭は国華倶楽部が既に前年四月十一日に上野韻松亭で挙行しており、このときは今泉雄作の祭典主旨説明、河瀬秀治の祭文朗読、大内青巒の講話等があったが、本年はこれを大々的に行うこととなったのである。

国華倶楽部がこのような催しを行なったのは同会幹事長正木直彦や会員河瀬秀治の画策によるものと思われる。正木は『回顧七十年』所収「法隆寺と清水亀蔵」のなかで、この催しについて

前述べたやうに私が奈良縣中學校長在職中、古社寺の寶物取調べといふ事に携はつて、度々法隆寺に出入りしてゐる中、聖德太子は外來文化宗教の自主的採用を示された大恩人である事を痛感したのであつたが美術學校に奉職するに及んで、日本の藝術に携はるあらゆる人々に、是非十分に聖德太子の御洪徳を知らせたい、と思ふに至つたのであつた。斯くて明治四十四年の六月に、先づ美術學校に於て太子祭といふものを行つた。

と述べている。河瀬は本校設立に尽力した人として本書第一巻に登場しているが、彼は福田行誠に帰依し、仏教擁護に尽くしたことで

も知られている。聖徳太子の信奉者で、明治三十年四月十一日に大内青巒、島田蕃根、桑田衡平と謀って上宮教会を起し、仏教関係の講演会や出版を続けた。高嶋米峰、村田丹陵、竹内久一、岡崎雪声、前田香雪らはこの会のメンバーであった（斎藤一暁『河瀬秀治先生伝』昭和十六年。上宮教会）。

太子祭祭典準備にあたったのは国華倶楽部の正木直彦、河瀬秀治、今泉雄作、高村光雲、前田香雪、村田丹陵、藤井祐敬、田口米舫ら委員たちであった（『美術新報』第十卷第七号。明治四十四年五月）。祭典当日は縉紳、名士、新聞記者等三百余名が出席し、河瀬秀治による祭典の趣旨と高村光雲作聖徳太子像寄贈に関する演説、法隆寺管主佐伯定胤および興福寺管主大西良慶、法隆寺執事佐伯良謙による上記太子像の開眼式、藤井祐敬、村田丹陵による供饌の儀、大西良慶による唄、佐伯良謙による散華、佐伯定胤による慶讃文奉読と読経、正木直彦による祭文朗読、舞楽（胡蝶、陵王）の奉納、長慶子奏楽が行われた。舞楽の舞人は莊司庄太郎、向山駒吉、神谷勇吉、楽人は多節長、岡昌次、中村要作、野沢勝太郎、江川安太郎、東儀文礼、法木芳次、小野亮広外一名で、装束は宮内省御用達装束師高田茂に新調させたものを、また、蘭陵王の面は竹内久一が東大寺所蔵の陵王の面に基づいて彫刻したものをを用いた。

記念展覧会は日本画科の教室を会場として御物をはじめ法隆寺、帝室博物館、内閣文庫、本校、日本美術院、東京帝国大学および個人が出陳した聖徳太子と法隆寺、および推古朝と六朝時代に関する絵画、彫刻、工芸品、古記録、経巻、建築模型、拓本、早崎梗吉將來の六朝時代頃の仏教や石窟の写真など多数が展示された。このよ

うに大規模な企画展が本校で行われたのは空前絶後と言ってよく、そこに正木直彦の威勢を垣間見ることができた。かつて明治三十六年に本校で華々しい美術祭が行われたが、正木校長の理想はむしろ今回のようなしめやかな祭典と展覧会の方であったのではなからうか。

祭典終了後、講堂で関野貞の「美術史上に於ける法隆寺の地位」と題する講演があった。その筆記は上記月報に掲載されている。太子祭のあと、正木直彦による弘安版憲法（木版）分与計画、記念展覧会出品目録頒布計画、美術通信社主幹小原大衛による光雲作太子像の銅像分配計画などがなされた。正木の法隆寺顕彰計画は『法隆寺大鏡』の出版（大正二年以降）、聖徳太子千三百年御忌奉讃式（同十年）と聖徳太子奉讃会設立の支援というかたちでその後も続く。

⑦ 塑造部卒業制作に関する規定改正

左記の上申書に基づいて塑造部卒業制作に関する規定が改正された。

塑造部卒業制作競技法変更ノ件ニ付上申

従来塑造部ニ於テハ卒業制作ヲナサシムル場合ニハ一人毎ニモデルヲ給シ各自ノ意匠ニヨリ製作ヲナサシムルコト、相成居候處斯克テハ非常ニ廣大ナル面積ヲ有スル教場ヲ要シ候ノミナラズ左マテ必要トモ認メズ 依テ左ノ方法ニ変更致シ度此段仰高裁候也

一 塑造部ノ卒業制作ハ全体ヲ通ジテ一人或ハ二人ノモデルヲ給シ同一ノ方法ニ依リ競技的卒業制作ヲナサシムルコト